

れ、男女、階級にかかわらず全ての人を対象に教育を推進し、男女間や階級間の格差是正にも貢献していった。後に、近代的な教育を受けた人々が、社会改革運動を主導し、大衆運動も活発になっていく [濱田 2008]。

1956年にケーララ州となり、1957年の選挙で共産党主導の左翼連立が政権を握って以降、共産党政権が政策に大きな影響を与えてきた。主な支持層が低・中間階級である共産党によって、土地改革、教育改革、社会福祉の充実など再配分型の社会政策が行なわれていった [太田 2010]。

こうした歴史的・社会的背景が、今回の大洪水発生後、寄付や救援活動など互いに物、金、人手を分けあうチャリティの精神に少なからず影響を与えていたのかもしれない。

最後に、この度の洪水で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げ

ます。また、困難な状況の中で復旧作業にあたっておられる方々に心からの敬意を表するとともに、くれぐれもご自愛下さいますようお願い申し上げます。

引用文献

日本語文献

太田まさこ. 2010. 「社会指標でみる女性の状況と現実—インド、ケーララ州を事例として」『アジア女性研究』19: 1-17.

濱田壽一. 2008. 「ケララーその成果と課題」『ソフィア—西洋文化ならびに東西文化交流の研究』56(2): 106-126.

ホームページ文献

AFPBBNEWS. 2018a. 〈<http://www.afpbb.com/articles/-/3187304>〉(2018年9月22日)

_____. 2018b. 〈<http://www.afpbb.com/articles/-/3186914>〉(2018年11月22日)

ESSS. 2018. 〈<http://www.essociety.org/>〉(2018年9月11日)

JETRO. 2018. 〈<https://www.jetro.go.jp/biznews/2018/09/08dfbc04fc737f3e.html>〉(2018年9月22日)

都会の一角に小さなオアシス「薬草園」

杉 野 好 美 *

インドネシアでの調査を行なうためには、調査許可に関する手続きが必要であり、首都ジャカルタにある数カ所の政府機関を訪

問する。その政府機関のひとつに、国内の治安・地方自治などを管轄している内務省(Kementerian Dalam Negeri)がある。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

内務省の受付には、朝から手続きのために各地から来たであろうインドネシア人たちが書類を片手に待っている。私が要件を伝えると「建物Fに行ってください」と指示された。省の敷地内にはたくさんのビルが立ち並んでいて、そこだけでひとつの小さな街区のようになっている。建物Fを探しながら進んでいくと、ビルとビルの間の決して広くはない中庭の一角に、たくさんの種類の薬草が植えられているのを発見した(写真1)。高く聳え立つビルの合間に、南国の日差しを浴びて、たくましく育っている薬草を見つけた時は少し嬉しくなった。それは、これから私が調査しようとしているテーマが、インドネシアにおける人々の薬草利用についてだからだ。

インドネシアの薬草は、一般的にタナマン・オバット (*tanaman obat*) という。タナマン・オバットは、熱帯気候に属するインドネシア各地に生息するさまざまな効能をもつ薬用植物/薬草である。インドネシアには、約3万種の植物が生息し、7,000種類の薬草があるといわれているとおり、生物多様性が豊かで薬用植物の種類も豊富である [Kementerian Kesehatan RI 2011: 1]。タナマン・オバットという言葉は広く使用され、人々が手に入れることができる薬草全般を指すが、自分自身または家族の健康維持・症状緩和のために煎じて飲むことが一般的である。また、ジャワ人を中心に、ジャムウ (*jamu*) ドリンクと呼ばれる薬草ドリンクにして飲用されることもある。

内務省で所要をすませた後、省内の小さな薬草園に戻り、通りがかりの職員に許可を得



写真1 内務省内の都会のオアシス「薬草園」(筆者撮影)

て、その薬草園内を観察した。よく見るとそこには、『*Tanaman Apotik Hidup (TOGA)*』という看板があった。タナマン・アポティック・ヒドアップ (*Tanaman Apotik Hidup*) は、「暮らしの中の緑の薬局」と意識することができる。トガ (TOGA) はタナマン・オバット・ケルアルガー (*Tanaman Obat Keluarga*) の略で、庭先など身近にある「家庭の薬草」という意味である。この看板には66種類の薬草名が記載されていた。さらにそれぞれの薬草には、インドネシア語の薬草名とその効能が記載されたラベルプレートが設置されていて、とてもわかりやすい。伝統的な市場やスーパーマーケットでよく売られ、料理にも使用されるレモングラスとパンダン (タコノキの一種) の葉や、ジャムウドリンクにも使用されるショウガ・ウコン類や、キンマ (コショウの仲間) の葉などが育っていた (写真2)。

しばらく薬草園内で観察していた私は、庭の世話をしている人に会ってみたいとなった。内務省の職員に、「省内にある薬草園は、だ

れが育てていますか」と質問したところ、「職員の奥さんたちが作って、育てています。もし薬草がほしかったら、薬草園に誰もいなくても『少し分けてください』と呟きながら、少しとっても大丈夫ですよ」と言われた。実は、今インドネシアでは、このように空間の一角に薬草園を作る活動が薦められている。3 年前に、中部ジャワ州スマラン市に留学していた時も、道沿いの一角を近所の主婦たちが薬草園にしていた。保健省や農業省が支援して、地区の婦人会（PKK：ペーカーカー、Pembinaan Kesejahteraan Keluarga）・学校などさまざまなグループが薬草園を作り育てている。コンペが開かれ優秀な薬草園は表彰される。婦人会は、内務省の管轄でもあるため、内務省も見本となるべく、率先して敷地内に薬草園を設置しているのかもしれない。

話は戻り、内務省内の薬草園にある薬草をひとつ紹介したい。クミスクチン（*kumis kucing*, *Orthosiphon stamineus* Miq.）というもので、これはインドネシア語で「ネコのヒゲ」という意味である。この紫または白い

花は、まさにネコのヒゲそっくり、ネコ好きは愛着をもつかもしれない。日本の沖縄県でも育ち、最近は京都などの園芸店で見ることができ、冬場の温度管理に気をつければ育てることができる。インドネシア政府の薬草研究機関によると、利尿作用・尿路結石・リウマチの抗炎作用・脂質異常症・高血圧などに効果があるそうで、特に他の薬草と一緒に飲むと利尿作用が増強されるとある [Kementerian Kesehatan RI 2011: 148-149] (写真 3)。

ジャカルタでインドネシア人と会話する機会があると、私は「薬草（*tanaman obat/jamu*）を飲んでいますか」と質問してみることにしている。先日回答してもらった職業運転手の 60 代男性によると、尿路結石になった時、先ほどのクミスクチンと 3 種類の薬草を煎じて、1 日 3 回 1 週間続けて飲んだところ、排尿時に結石が出て、苦しみから



写真 2 看板には、66 種類の薬草名が記載されている（筆者撮影）



写真 3 クミスクチンの花、ネコのヒゲにそっくりである（筆者撮影）

解放されたという。他にも2人の中年男性から同じような話を聞いた。見た目のかわいいネコのヒゲは、インドネシアの薬草として大活躍のようである。

年々高層ビルの建設が進み、排気ガスなど大気汚染の課題を抱え、慢性的な渋滞など、都市ジャカルタの生活には心休まるどころが少ないが、このような土地の一角に、薬草園があることで、人々が自然に触れ、インドネ

シアの薬草の知恵が守られているようである。みなさんも、これから調査許可の手続きの時などに内務省を訪れる機会があれば、ぜひこの薬草園に寄ってみてほしい。

引用文献

Kementerian Kesehatan RI. 2011. *100 Top Tanaman Obat Indonesia*. Jakarta: Badan Penelitian dan Pengembangan Tanaman Obat dan Obat Traditional.

きれいなキャッサバ

魚住 耕 司*

農作物を栽培している人たちにとって、多産で病虫害に強い品種は、そうではない品種より好ましいものなのだろうか。

カメルーン的首都ヤウンデから南に約108キロに位置するA村では、主食のひとつとしてキャッサバが栽培されている。

キャッサバの品種名

日本の米にコシヒカリ、ひとめぼれなどの品種があるように、キャッサバにも多くの品種がある。品種には古くから存在する在来種と、病虫害への耐性、収穫量、味の改善などを目的として意図的にかけ合わせてつくられた改良種がある。カメルーンでは焼畑耕作の

ために森林が失われているとされ、その防止策としても、小さな土地から大きな収量を生み出す改良種の普及が政府や援助機関などによって行なわれてきた。

A村で栽培されている在来種には、エコブレ (Ekobelé), ザエボマジエ (Zaébomagé), ンゴン・クリビ (Ngon Kribi), アタン・ドゥマン (Attends Demain), マニョック・パタット (Manioc Patate), マニョック・ジョーン (Manioc Jaune), ビトゥトゥ (Bitoutou) など多くのものがある。これらの品種名は、この地域に住むブルと呼ばれる民族が話すブル語、または、この国の公用語のひとつであるフランス語で記されている。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科